掛川市城山横穴墳調査報告書

1964

掛川市教育委員会

掛川市城山横穴墳調査報告書

1964

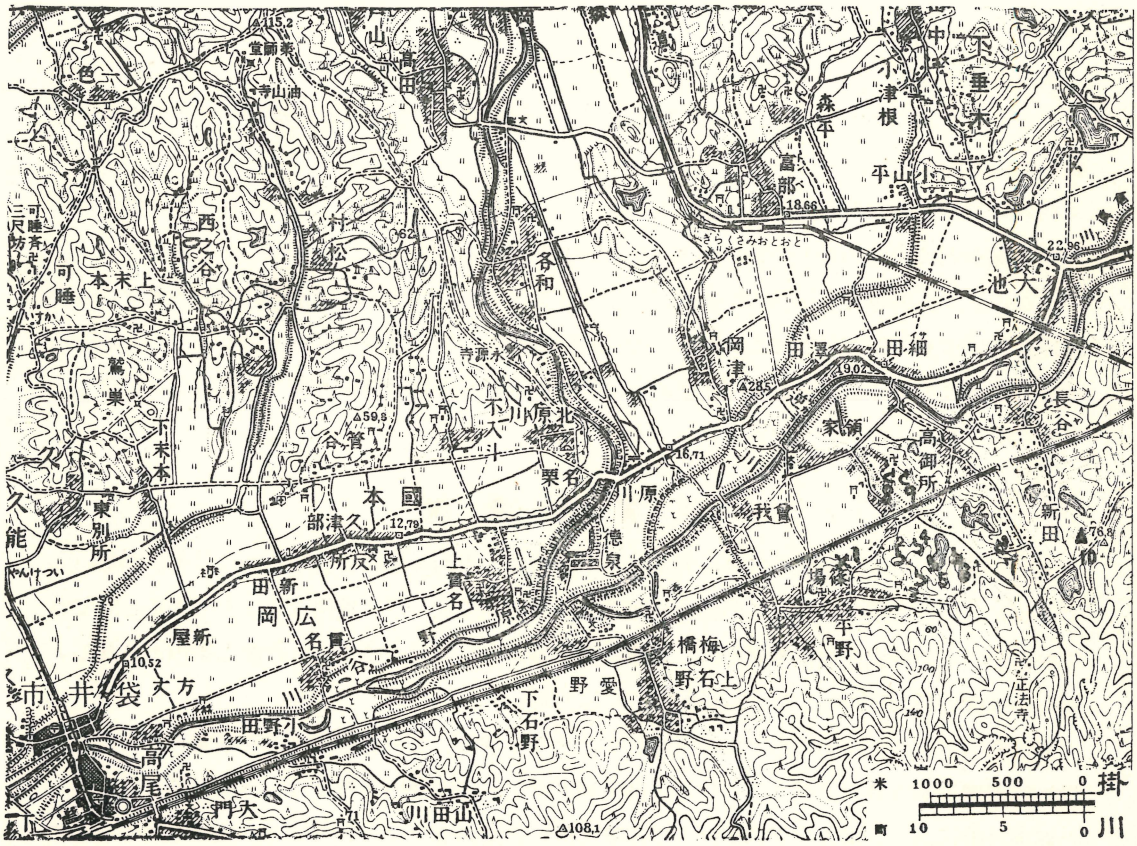
掛川市教育委員会

掛川市城山横穴墳調査報告書

平野和男
向坂鋼二
大谷純一

目　次

まえがき …… (2)
位置と環境 …… (2)
横穴墳の構造 …… (3)
人骨出土状態 …… (4)
副葬品出土状態 …… (5)
出土遺物 …… (5)
あとがき …… (6)



第1図　遺跡附近地形図及び横穴墳の分布

1. 城山横穴1基　2. キンペイヤダ横穴14基　3. 大代谷横穴A支群・14基　4. B支群17基　5. 同C支群7基
6. 同D支群28基　7. 押出横穴14基　8. 本村横穴A支群8基　9. 同B支群4基　10. 長谷銅鐸出土位置

ま　え　が　き

東海道新幹線の建設工事を請負った佐藤工業株式会社は、土砂の不足分を補なうために、城山（じょうやま）と呼ばれる丘陵を切り崩して採土作業を急いでいた。昭和38年5月27日、その現場でブルドーザーを運転していた1人は、排土板の下にポッカリ口をあけた空洞をのぞきこんでその中に横わった人骨を見て騒ぎ出した。

遺跡発見の報は、工事施行者の佐藤工業から、掛川市教育委員会に連絡された。同教育委員会では、そのことを我々に通報され、緊急に調査方を委嘱されたのであった。我々が現地に急行した時には玄室が大きく開口して、天井部の落盤もいちじるしく、現状のまま保存することは無理な状態であった。また発見された当初には、内部にかなり多数の、須恵器を主とした副葬品があったらしいが、それらは、近隣に住む心なき人々の手によって攪乱され、持ち去られてわずかに佐藤工業の関係者が保管されていた直刀1振、須恵器蓋・坏身2点が残されていたにすぎない。その他の出土品は、その後かなり探索したが、ついに行方が判明せず散逸してしまった。誠に遺憾な事といわねばならない。

緊急調査は、5月27日～29日の3日間にわたって実施した。作業の段取りとしては、玄室に遺存する人骨1体の発掘と計測、玄室内部の清掃と各種実測、それぞれ必要な限りでの写真撮影といった内容のものであった。

見るも無残な横穴の形骸と、神聖たるべき人間の永眠する部室に入り込んで、死者に供えられた副葬品を盗み去った者への怒りとは、我々の脳裡に深く刻まれて忘れられないであろう。

ここに、本調査報告が刊行される運びとなったことについては、戸田録氏をはじめとする地元関係者各位の努力によるところ、極めて大きい。明記して厚く感謝の意を表すると共に、調査に協力を惜まれなかった佐藤工業株式会社および掛川市教育委員会関係者にも、改めてお礼申し上げる次第である。

位　置　と　環　境

東海道線掛川駅と袋井駅のほぼ中間あたりの南側に、東西に延びる丘陵をへだてて、篠場（しのんば）という部落がある。この丘陵の西端は一段と高くなって、城山（じょうやま）と呼ばれていたが、この城山の北向き斜面に、本横穴墳は築かれていた。そこは、行政上掛川市に属し、掛川市高御所1513番地の1という地籍になっている。

掛川市の南方4㎞にある小笠山を主峰とした小笠山塊は、第三紀鮮新層群を基層とした、洪積世の砂礫層群から成っている。そして、鮮新層群は、小笠山塊の北麓では、丁度本横穴墳のあった篠場の附近から、東方一帯にかけての丘陵地帯に、露頭を見せている。いうまでもなく、この露頭が、横穴墳掘さくの自然的条件をなしている。

眼を沖積地に転ずると、小笠山塊北麓に沿って、逆川が西南流し、袋井市貫名のあたりで、南流してきた原野谷川と合流する。この逆川と原野谷川の合流点附近から、これら2本の川に囲まれ

た三角地帯にかけては、良好な沖積平野がひろがっていて、水田耕作に基礎を置く古代文化の、一つの中心地を想定するに恰好な地形となっている。本横穴墳は、この沖積地を一望におさめ得る、絶好な位置にある。

逆川をへだてた、篠場の対岸には、岡津の丘陵が突出している。かつて、この附近の奥の原にあった円墳から、吾作銘画文帯重列式神獣鏡が出土した。この鏡は、遠く肥後国江田の船山古墳出土鏡をはじめとして、全国に12面の同型鏡が知られた著名なものである。また篠場の東北方2㎞の、長谷からは、明和9年5月に高さ2尺4分（67.3㎝）といわれる銅鐸が発見されたと伝えている。この銅鐸が、駿河の小銅鐸を除いた場合、いわゆる銅鐸分布圏の最東端であるという事実も、すでに斯界に名高い。そして更に、篠場から高御所にかけては、遠江でも有数の横穴墳群集地帯であって、現在でも100基余を算えることができる。

本横穴墳は、以上のような環境の中に立地しているのである。

註）　城山の頂近くには、小円墳もあったが、いつの間にか姿を消していた。我々の不注意もあったが、関係者にはその旨注意を喚起することを忘れたわけではなかった。これも遺憾なことである。

横穴墳の構造

1．遺跡の状態

本横穴墳は、未開口であり、工事前にその所在を知ることが出来なかった。その結果、本横穴墳の構築されている丘陵はブルドーザーにより削り、崩されて著しく変容している。（図版1参照）

本墳の遺構の主要な部分である前庭部及び羨道は既に完全に破壊され、玄室の入口附近が開口し始めて遺跡の存在に気付き作業を中止したものである。

残存している玄室内部は、工事による新しい落盤以外はきわめて保存が良好で、内部床面には砂質粘土層が5㎝前後堆積していた。玄室奥壁沿いに、埋葬された人骨1体がよく遺存していた以外に副葬品は攪乱されていた。遺構の精細については次に記述する。

2．前庭・閉塞・羨道

前述の通り、前庭の構造、規模、羨道の形態や規模、羨道の閉塞の有無、構造等については全く不明である。

幸い破壊をまぬがれた部分が、羨道と玄室の境である羨門部附近であるため、僅かに、羨道の巾を推考することが出来る。現存する羨門部の巾は、45㎝を測るが、羨道の巾もこれを大差なく構築されていたものであろう。同じく遺存する床面の断面は、半円形に近い形状を示している。

3．玄　　室

玄室の形態は両袖式に属すもので、平面プランは、玄室入口巾、220㎝、奥壁巾260㎝と奥に向ってかなり拡がりをもっている。

羨門から、左右の袖部に至る壁面、及び奥壁面は直線的でなく、ゆるく内彎している。このた

め玄室の長さは、中心部で最長の 250 cm、最も短い右袖部で、199 cmの数値を示している。

玄室の縦断形は入口附近の天井部が落盤しているため明かでないが、奥壁がかなり彎曲しているため、半楕円形に近い形状であろう。

次に横断形についても同様に、玄室中央部で巾、250 cmに対して、天井部の高さ、132 cmと低いため、扁平な感じが強い半楕円状の、いわゆるドーム形を呈している。

壁面はきわめて入念に整形されており、平滑で構築時に使用された刃物の跡をほとんどとどめていない。内部は、奥壁に沿って、一般的に棺座と呼ばれる埋葬施設が構築されている。この施設より、30cm前後下った床面があるが、平坦で特別の施設はなく、羨道に向って僅かに傾斜し、羨門附近で傾斜を強め羨道に至っている。（第2図縦断セクション参照）

埋葬施設は、奥壁に沿って掘り残され段状に造出されている。両端の巾は77cm～75cm、中央最大巾、82cm床面よりの高さ、30cmの規模をもつものである。

形態は、両端に近くに帯状に突起が造り出されている。即ち東壁より15cm西壁より5 cmをへだて、巾77cm～75cm前後、高さは東外側3cm、西外側1cm前後と低いものである。しかし突起の内側は、低く掘りくぼめられているため、内矩の深さは、東端14cm、西端17cmを測り底部は、ほゞ平坦である。

奥壁、羨道に面した正面側には突起の造出はみられない。構築されている土層が砂質土層のため風化し実測図にみられる如く、形が一部分崩れている。

この埋葬施設については、形態及び後述する。人骨の出土状態などより、一般的に横穴墳内に構築されている、棺座とは異なり、直接、遺体を埋葬したものと推考される。

第1表　城山横穴墳計測値表

遺構名称	計測値 (cm)
方位	N6E
羨道巾	巾　40（推定）高さ不明　長さ　不明
玄室巾	入口　巾 220　中央巾 240　奥壁巾 260
〃　高さ	〃　高さ不明　〃高さ 131　〃高さ　80
〃　長さ	中央長さ 252　右袖　197　左袖　224
埋葬施設	巾　95　長さ　261　高さ　26

人骨出土状態

特記すべき事実として、棺座状の埋葬施設上に人骨1体分が、埋葬時の状態を推察し得る程度

に遺存していた。

人骨の埋葬は、頭部を東壁に向け、仮臥伸展葬の形を採っている。現在は、頭蓋骨は下顎骨より脱れ、側臥の形になっているが、下顎骨は仰臥の状態にあり、もともとは仰臥の姿勢にあったものであろう。頭蓋骨・下顎骨・肋骨を初め、四肢骨端まで身体各位骨が、ほゞ原位置を示しているが、下肢骨は古い時期の落盤によって破損し埋没していたため腐蝕が著しい。形態上はよく遺存しているが、総体的に風化が進み、もろくなっている。特に左右の肩胛骨・肋骨・腰骨の腐蝕が激しい。

しかし、古墳出土の他に類例に比すれば、人骨の遺存状態は良好と云うべきであろう。

以上の様な人骨の遺存状態より推察して、埋葬時の原位置転位していないものと考えられる。人骨の人類学的計測値・所見は別文にゆずるが、本人骨は熟年男子骨と推定される。

副葬品の出土状態

調査の経過で前述の通り、副葬品は原位置を示すものは皆無であり、保管されている。坏身、直刀は発見者の言によって復元し得る。直刀は、前記の人骨右上肢骨に沿って柄部を頭部にし、刃部を内側にして葬置されていたと云う。この位置に鉄サビの附著があることより明かであろう。

尚、人骨の辺囲は、特に精査したが、装身具類を初め、棺に使用されている鉄釘等他の遺物は全く発見できなかった。

坏身、坏蓋は、西袖部より出土と推定され、なお他の器形の須恵器も存在していたと云う（発見者の実見による）

出　土　遺　物

1. 直　　刀

刀身は平造りで、刃部 249 ㎝、茎部 6.5 ㎝と全長32.4㎝のきわめて短いものである。刀身巾も関部で 2.9 ㎝、鋒に近い部分は 2.3 ㎝あり、茎部は 1.3 ㎝を測る。茎には目釘穴はない。最初の取扱いが不適当で磨耗しているが、全体的に木質部の鏽着は認められず、又他の刀装具と考えられるものは全く発見されていない。刀身のみ副葬されたものであろうか。

2. 須　恵　器

坏身、坏蓋が各 1 点ずつ出土している。坏身は口径13.2㎝、深さ 4 ㎝あり、蓋受の立上りは、かなり内斜し高さは、0.6㎝ を測る。胴はゆるやかな曲線をもち、胴部の張りはみられない。整形は良好であるが、焼成は悪く軟質である。

坏蓋は径13.4㎝、器高 4.6 ㎝あり焼成、整形ともに良好である。前述の坏身とは口径を異にしセットにはなりえない。

あ と が き……資 料 的 意 義

本横穴墳の調査結果は、以上の如きものである。これに基いて以下本墳の資料的意義に言及して置こうと思う。

第1の点は、本横穴墳の年代に関するものである。出土遺物の項に記述した如く、本墳内に副葬されていた品々の多くは、いずれかへ持去られて、ついに我々の眼にふれないでしまった。そして、わずかに直刀1口と須恵器坏・蓋2点を、それもすでに工事関係者の手で取り上げられていたものを、得たにすぎない。しかし、このわずかな資料でも、特に須恵器は、本墳の年代を知る貴重な材料である。その器形の示す型式的特徴から、我々は、須恵器第Ⅲ型式中葉の蓋坏であることを認めたのであるが、このことから、本横穴墳の年代が6世紀代にあったことを推定し得る。

遠江の横穴墳の中には、例えば榛原郡榛原町大ケ谷横穴墳中の1墳の如く、第Ⅲ型式の須恵器を出土するもののあることから、我々は、横穴墳の築造が6世紀代から始っていると推定していたが、遠江の中心部では確証を把んでいなかった。本横穴墳は、ここに確実な1例を加えることとなったのである。また最近、偶然な機会から、本墳より更に一時期古い横穴墳を発見した。本墳の東北方2.2㎞の地点であって、本墳とは大きく一つのグループに属している。

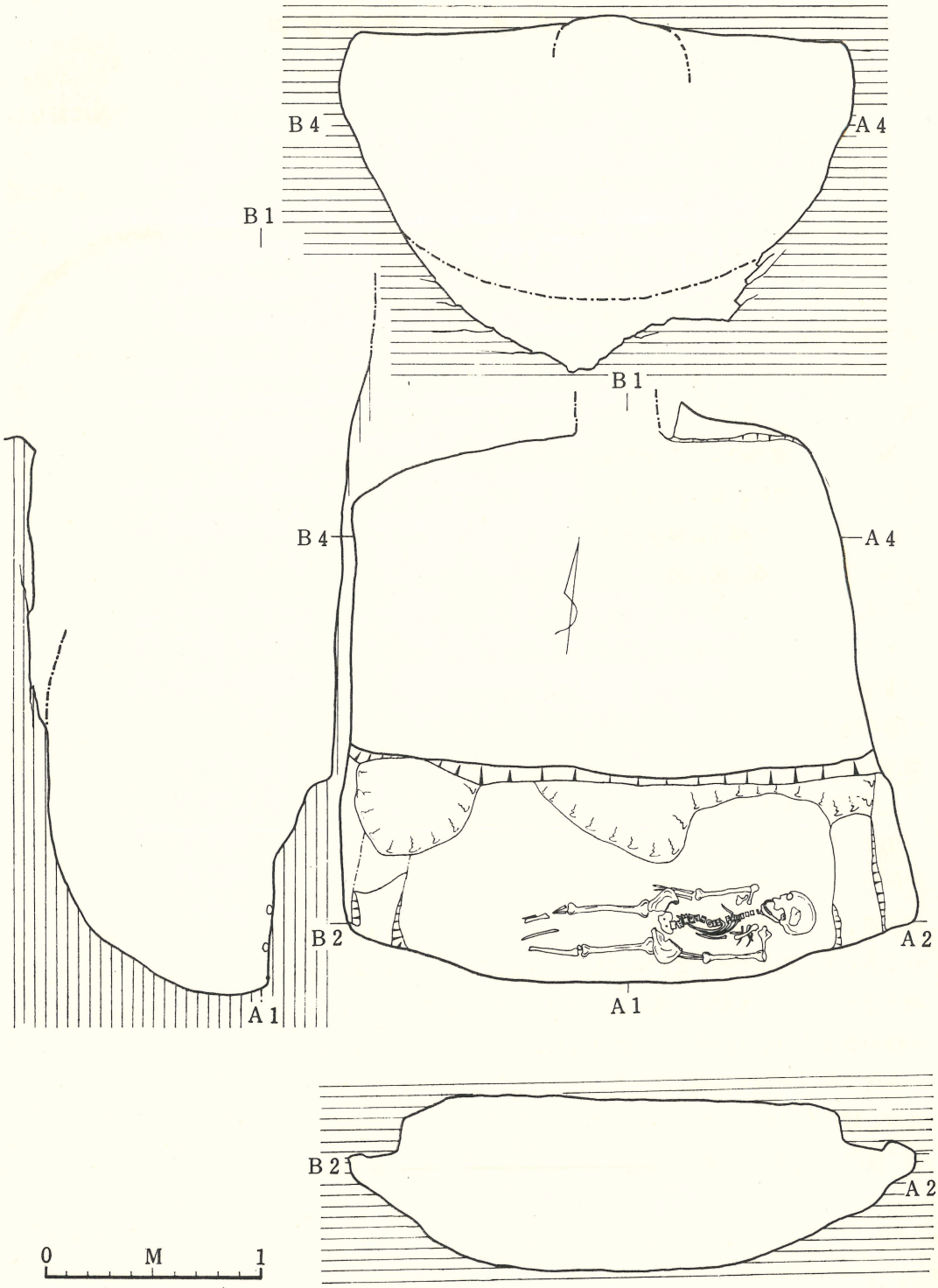
他方、遠江における横穴式石室採用の時期は、須恵器第Ⅱ型式頃の疑もあるが、確実な例では第Ⅲ型式前葉の時期である。そして同中葉の時期にはかなり普遍化したようである。従って、横穴墳の構築は、横穴式石室採用とほとんど時間的な開きを示さなかった。という点を注意したい駿河においても、すでに同様な事実が知られている。

本横穴墳の資料的意義の第1は、以上の点にあるといえよう。

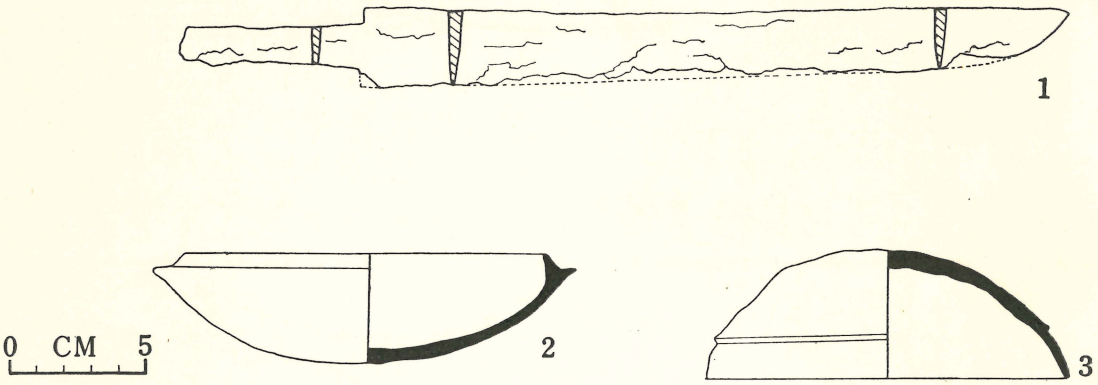
第2の点は、構造に関するものである。本横穴墳の玄室は、2.40m×2.52mの略正方形を呈していて、これに短い羨道が取付けられた形をしている。この形状は、細長い長方形を示す多くの横穴墳とは、大分趣きを異にしている。遠江における横穴墳の研究は、未だその緒に着いたばかりであるが、現在の所、これ程に整った正方形プランの例は、他に見出していない。従って、この正方形プランのものが、遠江における特殊例であるのか、その年代が示すところからみて古式の様相を示すのかという点の、解決はなお将来の研究に待とうと思う。

本横穴墳の資料的意義に関して、以上2点にしぼって述べたのであるが、その他の問題については、最近発見した宇洞ケ谷横穴墳の報告を述べる際に論及することとしたい。

註)　望月董弘、手島四郎編『駿河伊庄谷横穴墳』　(昭和38年3月)



第2図　城山横穴墳実測図



第3図　城山横穴墳出土遺物実測図

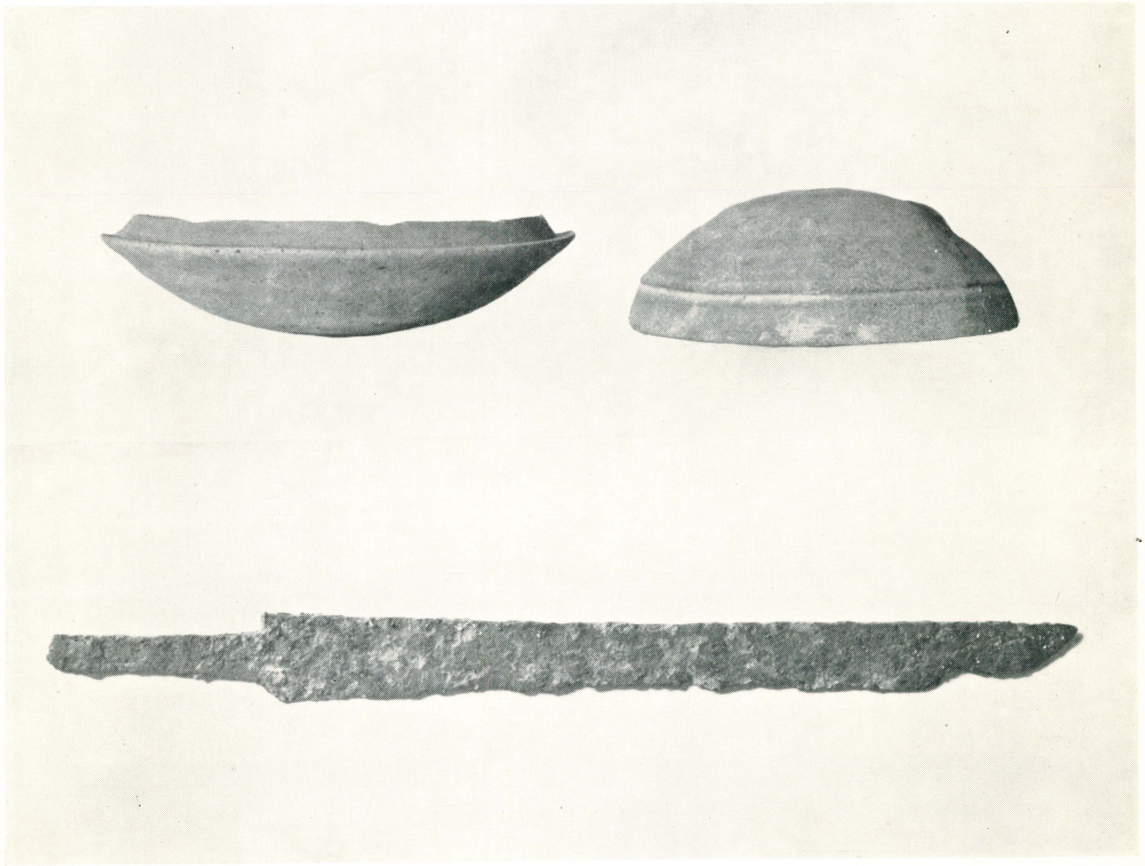
図版 第1.　城山横穴墳の調査

A　城山横穴墳の遠景

B　羨門部より玄室内部を望む

図版 第2.　城山横穴墳の調査

A　人骨の埋葬状態



B　出土遺物　　(上 須恵器　下 直刀)

昭和39年7月

掛川市城山横穴墳調査報告書

編集発行　掛川市教育委員会

印刷所　株式会社山田印刷所